

「福島震災を語る会」

参加報告

2012年10月8日(月・祝)

快晴に恵まれたこの日、福島県須賀川市にある東北宣教センター「須賀川シオンの丘(写真1)」において、「福島震災を語る会」が実施されました。10月7日に、拡大 FCC(福島県キリスト教連絡会)や支援者の集い「被災地における宣教」があったため、前日より泊まられている先生方が多く見受けられました。



(写真1:メイン会場となった「須賀川シオンの丘」チャペル)

福島県の各所の先生方が集結され、それぞれの被災当初の様子、そこから現在までの道程、これから向かっていくところ、の三点を中心としたディスカッションが、全体会、グループ別討論に分かれて展開されました。キリスト者を中心とした会であったため、私が把握した範囲では、他宗教者はともに仏教者である東北大学の谷山洋三准教授と私だけでありました。それでも、会が終わった後、「よく来て下さいました」とお声かけ頂いたことで、“ここにいても良かったのだな”と最後になって溶け込めた感じを抱きました。

タイムスケジュールとしては、午前9時からオリエンテーションと「語る会Ⅰ」が始まり、午前11時から「語る会Ⅱ」、一時間半の昼休憩を挟んで、午後1時30分から「語る会Ⅲ」、最後に「みんなで祈る時」という全部で四部構成となっております。

オリエンテーションにおいて、参加者総勢70人が集まったの議論は発言の機会が少なく、グループに分かれることにより、それが効率的に行われることを、FCC委員長の木田恵嗣先生より説明がありました(写真2)。「語る会Ⅰ」は、震災から今までを語ると題して、小グループが合計4つに分かれて(私が参加したグループⅡは聴衆を入れて、およそ20人がチャペルに残り、ディスカッションを行いました)、予め準備された質問項目として、「①地震が起きた際の様子」、「②地震の直後、どうされた?」、「③福島第一原発の爆発後は?」、「④放射能増加によって・・・?」、「⑤印象的な出来事は?」という問いがあり、それにしがたってファシリテーターの方で発言内容が広く深く熟成されていきました(写真3)。



(写真2:オリエンテーションの風景)

参加したグループⅡの参加者からの意見を中心に感じたことを述べます。質問項目①②につきましては、礼拝が終わった時間帯であったり、遅い昼食をとられている最中であったり、と昼すぎのごくごく当たり前の日常を送られている時間帯であったことが窺えます。その際に、ご家族のことを想ったり、あるいは“神さま、どういことなんですか！”と大声で叫ばれたり、その瞬間は特に家族の一員として、あるいは信仰者としての思いを吐露されていました。また、地震直後に車にいと、近所の方から「外に出ろ！」と言われ、見れば道路が地割れで寸断されていたこと、二階の窓から黒いものが見えて、“一体、なに？”と思っていたら、それが津波であったこと等、どれも実際に現場にいないと分からないことを次々と発言されていました。

ご近所の方から「教会は高台にあるから大丈夫だ」とお声かけを頂いたこと、逆に、「教会には神さまがいらっしゃるから大丈夫！」と近所の方々へ訴えられたことから始まって、地震後、神さまが建物を与えて下さったから、そこでの受け入れを考えていたが、実際は近所の方は他の避難所へ避難されていたり、逆に、教会に教会員や近所の方々が10人ほど避難され、一週間ばかり生活を共にしたり、あるいは避難所になっていた教会からは離れることができなかったという意見まであり、どれも教会が避難所として機能するかどうか、教会員やご近所の方々をどう支援していくか等に対して瞬時の判断を求められていたことが明らかにされました。幸い、会場となったシオンの丘には各方面からガソリンをはじめとする様々な物資が集まっていたため(そうは言っても、チャペルの天窓のガラスが下の机に突き刺さっていたようですが)、当初はそれをどう有効利用するか、何を優先させるかということを相談し、シオンの丘を拠点にして各地に支援を続けられていたそうです。

質問項目③④に関する放射能のことについては、当初、原発が爆発するという噂が方々で流れたり、地域内では様々な情報が錯綜していた様子で、何を頼りにして良いのかが分からなかったりと苦悩された現状も紹介されました。県外から支援に入られた方がすぐ帰ってきなさいと言われるほど線量が高いようだを知り、子どもだけでも避難させなければならぬ状況なのではないかという不安が増大したこと、結局子ども達を県外に避難させるため、その段取りを整えていたこと、いろいろな情報から効果的ではないかと考えて、自宅の窓をテープ止めしたこと、具体的な数値が出てきても、それが一体何を示しているのか、どれほど危険であることなのかが分からなかったこと等、まさに福島県という地域に特に生じた放射能という独特の問題により、収集した情報をどう処理したら良いかが分からず、ただただ限られた知識から現状に適した方法と思われる判断をそれぞれが下されていたのではないかと感じられました。その苦悩の中、自分を頼りにして下さる教会員を放ってはおけないが、教団からは避難しなさいとの要請がくるという究極の選択の中で、自分はどうすれば良いのだろうかと思われながらも板挟みの状態になっておられた方もいらっしゃいました。

ライフラインに関しては、全然問題なく大丈夫だったという地域もあれば、一週間から三週間ほど駄目だった、その日の夜から電気は復旧したという地域等もあり、それぞれの地域や被害状況により様々でした。それらが復旧したことにより、例えばテレビやパソコンが使える、情報を整理する事ができた面と、情報過多の状態から余計に混乱を招いたこともあったようでした。実際、ラジオは

「屋内に居なさい」という情報がなく、かなり情報が制限されていたのではないかと疑いたくなるような情報量であったのに対して、テレビの方がいろいろと情報が豊富であったようですが、情報量が多すぎてそれを整理するのが逆に大変になり、その結果、十分な状況把握に至らなかった、あるいはテレビそのものを見る暇がなかったという意見もございました。そういうメディアを使う方法以外に、例えば、地震発生の二日後の日曜日に、それぞれ持ち寄った情報を交換したり、共有したりされていたようです。

他方で、教団の方から風向きが変わるように祈りなさいという教えがあり、13～14人の共同生活者(三割ほどがクリスチャン)がみんなで祈りを捧げたとのことでした。その発言の際に、ファシリテーターより実はこれに関して石巻の寺院でも、朝のお勤めが共同生活における秩序を保ったのだという情報が与えられましたが、風向きが変わることはもちろん望ましいですが、それよりも共に祈ることにより、スムーズにその場にまとまりが実現できたのではないかと感じました。

質問項目⑤については、震災後の賛美歌が胸にしみわたり、震災後の語りをみんなで共有したことにより繋がりができ、それぞれがそれぞれを支えることができたというかなり大切な部分について語られる参加者がいらっしゃいました。

震災直後から様々な判断を迫られていた方々が多かったわけですが、その判断に対して、あるいは自分自身の考えに基づき発した言葉によって傷ついておられる方もいらっしゃいました。ほんの一握りの意見ですが、子どもが小さいが、家族が離ればなれになるくらいならば、家族と一緒にいることを選択したという方、一番線量が高い時に、子ども達を外に出していたことが今でも罪責感となって残っている方、他地域から来られた方に“スクリーニング”を受けてきたかを尋ねてしまい、それをずっと後悔し続け、神さまにもずっと悔いている方、そのような何かを背負って今も生きておられる方々がいらっしゃるということが紛れもない現実なのです。



(写真3:グループのディスカッション風景)

屋休憩には、焼きそば、たこ焼き、たい焼き、綿菓子屋台風に準備され、参加された先生方の中からも調理に参加される先生がおられ、すごく和やかな時間が流れておりました。それぞれの屋台において、用具からして本物志向であり、一時は行列ができるほど賑わい、皆さまがおいしく召し上がられていました。一段落すると、そこかしこで初対面の挨拶から久しぶりの挨拶まで、青空の下、本当に気持ちよく、まさに屋外ならではの時間をそれぞれが満喫されている感じでした。

午前中のディスカッションを踏まえて、今後のことについて、再度グループ単位で場がもたれました(グループⅡは、聴衆も一人ずつ発言する機会が与えられました)(写真4)。これからのことでは、もう引越しも自力では出来なく、仕事もない場合が多い高齢の方々の支援をどうしていくか、心のケアという言葉がよく取り上げられるが、助けに来ましたよということでは、完全に相手にされないだろうし、何も出来ないということで寄り添うことが必要になってくるのではないかと、本当に切実な課題が浮き彫りにされました。

それら一連の流れを受けて、「みんなで祈る時」において、“神さまがいらっしゃる、みんなで支えていこう！宗教者自身も被災者なんだから・・・”という言葉が表現しているように、祈りの中に生かされていることをしみじみと感ずることができたわけです。



(写真4:午後のグループ討論の風景)

全体を通して本当に辛い話ばかりでした。同じ被災地という捉え方では決して言い表されない問題が次々と語られました。そんな中、印象的だったのは、「祈ることにより、黙って人の話を聴くことができる力を与えられた。」という声が象徴していますように、まさに祈ることを大事にされていること、そして祈る力の偉大さを感じさせられたということでした。一方で、誰も非難することはできませんが、宗教者として、また人として、その当時の行動について、今も悩み苦しんでおられたり、宗教者(あるいは信仰者)としての自分を振り返った際に、果たしてその与えられた役割を果たすことができているであろうかと自分自身に問いかけ、その償いのために、今も何かのお役立てができればという思いをもって支援を続けられたいという声も聴くことができました。祈りに支えられているとはいえ、宗教者(あるいは信仰者)であっても、一人の人間には変わらないことを痛切に感じました。

また、仏教者としての立場から最も感じたことはキリスト教者の集まりに対する違和感ではなく、むしろそれぞれが大事にしている宗教的背景は宗教者としての基盤の上ののってくるものであるという確信でした。どの宗教でも、どこの教団に属していても、宗教者という役割において、まずはなすべきことがあるのではないかと、求められるものがあるのではないかと問われているのではないかと思われました。

そして、今回の福島県における語りの中で、今まで参加させて頂いたシンポジウムや講演会と明らかに違ってみえたのは、やはり放射能の問題でありました。これまでの議論と比較して、どうかではなく、根本的に違う捉え方をしないと、問題の核心自体に到達できないように感じたのでした。まさにタイトルにもあるように、“福島震災”を語るということなしには、根本的な復興や復旧とは語る事が出来ないのではないのでしょうか。支援がかなり減少してきて、小さなカイロで喜ばれる震災当初の心の状態に戻りつつあるかもしれません。今一度、支援ということについて、宗教の枠組みを超えて、われわれ宗教者が考え、そして行動や実践に移していくことが求められます。一つ一つは小さなものであっても、それが蓄積されれば、いずれ大きな流れになり大きな働きになるのではないかと、細々とでも息の長い積み重ねの大切さを再度確信いたしました。

合掌

文責:森田敬史